
ゴン助

馬路キレ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴン助」

【著者名】

N5667D

馬路キレ子
「ゴン助」

【あらすじ】
のりつくりの男が、公園で紙面屋の話を聞く。そのお題は
「ゴン助」…

(前書き)

読む前に注意

この物語はフィクションです。

実際に存在する団体名、役職名などは一切関係ありません。

描写に関してあえて端折つてる部分がありますが

そこは想像で保管してください。

「これは私が小さいときには、おじいさんに教えてもらつたお話をです」

都會の喧騒を離れた場所に、えらく氣張つた紙芝居屋が来ていた。
お題目はなんだ？桃太郎か？浦島太郎か？金太郎か？

「今日のお題目は『コン助』」

「コンスケ？聞いた事ない話だな。
どれ、ベンチに寝転ぶのにも飽きたし、話を聞いてみようじゃない
か。」

「昔々、山の麓に貧しい村がありました。そこに、コン助といふもの
がありました」

「昔々なにがしどう、紙芝居によくあるいつものパターンだな。

「コン助の母はコン助を生むとすぐ亡くなり、父親はコン助が6歳
の時に病気を悪くして死んでしまいました」

天涯孤独か、よくあるパターンだ。

「コン助は真面目でありましたが、両親が居ないということだけで、
それからまつとうな仕事につくことも出来ずには、15の時、ついに
盗人になりました」

堕ちたなゴン助。

「盗人家業に精を出す中、旅をしながら各地を転々とするゴン助は、川で水を飲んでいると、そこにいる罠を見つけました」

お、物語の起か。何が起つるのだらつ。

「ゴン助は川べりにかかる罠をよく見ると、美味しそうな川魚やウナギなどが大量にかかるており、これはシメシメと今日の晩御飯にしようと奪つていきました」

さすが盗人。しかしその罠の持ち主は誰だ？

「しばらくすると川の手にあでやかな着物を着た美しい娘が一人。川べりにかかっていたはずの罠の所を見てシクシク泣いています」「どうしたのだらつ？」

「ゴン助は魚を頬張りながら娘のほうを眺めています。美しい娘でした。ゴン助は悲しみに暮れる艶やかな彼女の姿を見て、何か心中で熱い物を感じました。彼は、生まれて初めて恋をしたのです」

一田ぼれつてやつか。

「ゴン助はシクシクと泣く美しい娘の後をこつそり追いました。夕暮れの道を進みたどり着いたのは、ゴン助の暮らした村を思い出させるボロくて貧しい集落の長屋の一軒でした」

思い出か。

「娘が家屋へ入ると、ゴン助は後を追つようすぐに障子戸の横につき、聞き耳を立てました。薄い障子戸の中からほ苦しそうなうめき声が聞こえます」

誰かいたのか？旦那か？

「美しい娘はいました。『おとうさん、すいません。病氣のお父さんのために精のつく食べ物を取りたかったのですが、誰かにとられてしましました』と」

うわーゴン助いたまれねえ。

「娘のお父さんは何も言わず苦笑をわざと笑い顔に替えています。『お佳代、お前はいい娘だつた。盗んだ奴を憎んじやいけないよ。私はどうせ長くない。お佳代のその気持ちだけでいいんだ。母さんも死んで、私もじきに死ぬだろつ。これからはお前の幸せのために生きなさい。私のことは忘れてくれ…』そういうて父親は息を引き取りました。お佳代は一晩中泣きじやくりました」

娘は天涯孤独、ゴン助と同じ境遇になつたのか。

「ゴン助はいたたまれない気持ちになりました。たとえ盗人の身に自分を落としたとしても、彼も人間です。同じ天涯孤独になつた者の気持ちがわからないはずありません」

そうだろうなあ。

「その後、お佳代の父親の葬儀が終わり。チラチラとゴン助は顔を出しては、お佳代のために何かしてやりたいと思いました」

健気だな。

「しかし、ゴン助は盗人の身。会つて話せば役人に捕まってしまうし、お佳代の父親を間接的にとは言え殺してしまったため、自分の正体も明かせず、つのる恋慕との板ばさみになりました。かといって嘘をつけるような人でもなかつたゴン助は、一計を考えました」

ほつほう、どんな作戦？

「自分の手足についた自慢の盗人の技で、お佳代に援助をしようと思つたのです」

盗人が良心に目覚めるわけか。

「その日からゴン助は色々な盗みを働きました。ア「ギな両替商から金を奪い、威張つた侍からスリで身銭を巻き上げ、人を騙す庄屋の倉に忍び込んだり、女をかどわかしては遊郭に売り。おどろくべき早業で大金を作つては密かにお佳代の家に放り投げていました」

恋は盲目かね。まったくやることが大小凄いこと。

「お佳代は不思議がつてゴン助の投げ込む金には手をつけませんでした。ですが金の匂いは誰しも塞げません。そのうちに長屋の隣に住んでいる意地悪庄屋の息子、半兵衛がお佳代の隠し持つた金に気づいてしまいました」

これはやばい匂いが・・・。

「半兵衛はこれは自分のところから盗まれた金ではないかといつぱ

をお佳代に言つと、もちろんお佳代は知らないの一點張りでしたが、半兵衛は怒つてお佳代を襲いました

やばっ助けるゴン助！

「その頃、ゴン助はいつものようにお佳代の長屋の前で金をいれようとしていましたが、中で襲われているお佳代を見て、いてもたつてもいられず、中に入るなり持つていた短刀で半兵衛を殺してしました」

ナイスゴン助！グッジョブゴン助！

「ゴン助はお佳代に『怪我はないか』と言つと、お佳代は乱れた衣服を整えながら何度もゴン助にお礼を言いました。ゴン助はお佳代のチラツと見えた柔肌が目に焼きついていましたが、恋した女に恥はかかせられません。顔を背けて、後ろを向いて、聞こえるお佳代の衣擦れの音に、何度も自分に湧き上がる興奮を抑えました」

男なら誰しもわかるなその感じ。ところでなんかこの話工口くないか？

「お佳代は半兵衛の死体を見ながらゴン助に再び感謝をしつつ、名前を問いました。投げ込んでくれたお金も彼がしてくれたものだと直感的に感じました。しかしゴン助はお佳代の質問にそつなく『裏わっていたのを助けただけで、金は自分ではない』と答えました。何度も執拗に問うお佳代でしたが、ゴン助はそつなく言い返します。盗人である身分と、恋焦がれる自分の両方に悩んでいたのです。結局何も言えず、半兵衛の死体を抱いで川にきました」

ゴン助、本当は言いたいのに、男だね。

「ゴン助は半兵衛の死体を夜の内に川辺に流すと、何も言わずにお佳代の元を去つていきました。しかし翌日、河の手にあがつた半兵衛の死体を役人が見つけてしまい、凶器の短刀と長屋の血の跡から、犯人はお佳代ということになってしまいました」

冤罪だな…。

「お佳代は奉行所の白州に出されました。何を聞かれても何も言いませんでした。縄目にあいながらも、助けてくれたゴン助の事をかばつっていたのです」

健氣だな…。

「ゴン助はそのことも知らずに、いつもどおりの『お勤め』をしていました。金をもつてまた影ながらお佳代を助けよう、そうすれば何時の日かお佳代に告白できる口がくるさ、それまでは我慢するんだと自分を言い聞かせていました。そして、その頃、奉行所で裁きを受けるお佳代の罪が決まりました。3両以上の盗みと半兵衛を殺した殺人の罪で張り付けの極刑、死罪です」

ああああああ…。

「ゴン助がお佳代の処刑に気づいたのは、処刑当日の朝でした。ゴン助は今まで盗んだ金を全て風呂敷にいれると、刑場まで急ぎました。遠い刑場まで、ひたすら思い荷物を持って走るゴン助の額から流れる汗は、そのうち枯れ。不安定な砂利道に何度も躊躇、すでに草履は剥ぎ取られ、裸足で砂利を走るゴン助の足はいたるところ流血していました。しかしゴン助は走りました。まだ自分の名も心も告げていない女のもとへ」

……。

「ゴン助がついに刑場にくると、十字の張り付け台にくくつづけられたお佳代の姿がそこにありました。ゴン助は倒れながら顔を向けて言いました『盗みも殺しも、私がやりました！その娘につみはありません！裁くならどうか私を…』と

……。

「奉行が驚いた田で立ち上がり、張り付けになつていてるお佳代に言いました。『あの男の話。本当か？』と」

……

「しかしお佳代は首を横に振りこう言いました。『会つた事も、見たこともない男です。どこぞの遊女と間違えているか、どうせ私のやつたことを愚かにも笑いに来た偏屈なやつでしょ』と」

……ああ……！

「奉行は訝しげにお佳代を見ていたが、表情も変えず胸を張つて言うお佳代の態度は嘘をついているようには思えませんでした。何度も大声を張り上げるゴン助でしたが、ついに声は届かず。お佳代は処刑されてしまいました」

……なんとこう不運。

「ゴン助は川原に手を何度もうちつけて泣きました。自分の優しさのせいで好きな女が死ぬ。悔しくて悔しくて、皮が破れ、血が出て、

風呂敷に包んだ金があたりにばら撒かれても、ゴン助は一度も顔をあげることなく泣きました

……無念としか言いようがないな。

「ゴン助は刑場の近くにあつた綺麗な花を見て、お佳代の事を思い出し。亡骸の近くに小さな墓をたててやりました。花をそえて、小石を積み上げて、ゴン助は何度も何度も謝つて拝みました。生前のお佳代を憎み、その墓を倒す人もいましたが、ゴン助は毎日同じ所に来ては墓を建て直し、泣いて謝るしかありませんでした」

……
「その3年後、ゴン助は盜人家業から足を洗つて、町で立派に飾り職の職人家業を始めました。ゴン助は手先が器用でしたからメキメキと腕をあげ、街一番の飾り職人となりました。その一生懸命さから、器量良しの娘との縁談もありましたが、ゴン助は全て断りました。お佳代の影が見えたからかもしれません」

……えらくなつたな

「そして四十を迎えたゴン助は、町に捨てられた赤ん坊を養子に迎えました。赤ん坊は女の子でした。ゴン助は、血色良く色艶が整つたその赤ん坊と添えられた艶やかな産布を見て、この赤ん坊に名をつけました。『お佳代』と……」

パチ…パチパチ

「おやおや、子供も達は、とうに居ないのに大人が拍手をしちゃあ
いけませんよ」

「いや良かったよ。ゴン助。心にしみる話だった」

「そりやいけませんね。心にしみるなんてのは古傷のある人の言い
方ですよ。もしかしてお客さんはすねに傷持つ人なのかい?」

「昔ひょっとね……どうだい、種になるかどうかはわからないが、俺
の話を聞いてくれないか?」

「そりや結構。私も話は大好きでね。どうですか?酒でも酌み交わし
ながら」

「いいねえ……ゴン助の話の続きを聞こひじゃないか」

「つしてひょんなことで出会い た紙芝居屋と俺は
寒空の中、赤提灯を手指して歩き始めた。」

(後書き)

＝＝＝＝＝あとがき＝＝＝＝＝

最初は童話のゴン狐の現代版を書きたかったのですが、
救われないはずのゴンが助かつて生き延びちゃつたり
嫌な気分になる最期の部分をちょい幸せで終わらせたりと
いつの間にか、ごんぎつね + 大岡越前 + メロスという
感じになってしまいました。

原作のゴンぎつねの主人公に撃たれて死ぬのは
最期の火縄銃の演出と併になんとも切ないです。.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5667d/>

ゴン助

2010年10月12日15時47分発行